

## 三三二三年 メタファリカ前夜

バスタリアの街で行なわれたメタファリカ前夜祭。  
その中心地である広場には櫓が組まれていて、そこに設置された席にネネシャとインフェルの姿があった。

櫓の周りでは大勢の人々が詩と音楽に合わせて踊っている。

「……何やってんのかしら、私？」

インフェルは今の自分たちの状況を見て頭を抱えるが、隣のネネシャは楽しそうに、

「面白いと思わない？ こういうの私、前に何かの本で見たことがあるわ。確か蛮族が獲物を捕まえた時に、その獲物の周りをこんな風にね……」

「何を讀んだのかはわからないけど、それは間違ってるわ」

はあ、とインフェルがため息をつくのと同時に、音楽と踊りが止まった。

自分の態度に呆れたからだろうかと思っただけインフェルは慌てて姿勢を直す、その横でネネシャがスッと立ち上がり、

「素晴らしいものを見せていただけただけのことを感謝いたします」

どうやら普通に終わっただけのようだ。ホッとしたのも束の間、インフェルはネネシャに肩を突付かれ顔を上げた。  
人々の目が、インフェルに向けられていたのだ。

……わ、私も何か言うの？

ギョッとしてネネシャの方を見ると、ニコッと笑顔で返された。そういうことらしい。

仕方なく立ち上がるも、インフェルはその詩や踊りに対して何の感想もなかった。正直な話、自分にとっては時間の無駄としか思えなかった。とはいえそれを正直に言うわけにもいかなければ気の聞いた感想を言うこともできない。

どうしたのだろうか。そう考えたインフェルは、隣に立つネネシャを見た。

「……………」

「どうかしたの、インフェル？」 ある方法を思いついたインフェルは、咳払いをして民衆の方を向いた。

「私の感想を言う前に、一つみんなに言うておきたいことがあるの」

一体何を言うのだろうか、と興味津々の表情でいる民衆の視線を感じ取ったインフェルは、隣に立つネネシャに指を向け、

「この子も混ざりたがっていたわ」

沈黙が数秒ほど流れた。

「……え、え？ わ、私？」

覚えのない話に慌てふためくネネシヤを見てクスリと笑うと、  
「冗談よ。素晴らしいものを見せてもらったわ、ありがとう」

インフェルの冗談で慌てふためくネネシヤの姿に、笑いが生まれた。

今まで表舞台で活躍してきたネネシヤではあったが、どうしても御子職務として行動をしてきたために、民衆の前ではあくまでも御子としての姿で立ってきた。そのため、今のような姿を民衆達に見せるのは初めてだった。

そんなネネシヤの新たな面を見せられたこと、そしてインフェルの賞賛の言葉に対し、人々は喜び、笑い、そして二人の御子への歓声を上げていく。

「も、もお……酷いわ、インフェルったら」

顔を真っ赤にして腰を下ろしたネネシヤは、頬を膨らませながら文句を言った。

「ゴメンゴメン、謝るわ……けど、これで良いんでしょ？」

「そ、そうだけど、でも……」

「そんな可愛い顔していると、みんなに惚れられるわよ」

……まあ、私が片っ端から追い払うけどね。

「も、もお、インフェルつては……」

どんな表情をすれば良いのかわからず、困った表情で真っ赤になっているネネシヤ。

ごめんごめん、と再度謝りながらも、インフェルはほっとしていた。何も感想を抱けなかった以上、ネネシヤの言葉を真似るのが一番だと思った。しかしただ真似た言葉を言っただけではウソだとバレてしまうかもしれない。だからネネシヤの表では見せない一面を見せることで、そっちの方に興味を向けさせたのだ。

表舞台では自分はネネシヤのおまけだと思っているインフェルは、自分が何を言おうと民衆は特に何も感じないと思っていた。だからどんな感想を言おうと白けてしまおうと感じたため、ネネシヤを話題に出すことで盛り上げようと考えた。その結果はご覧の通りだ。

「さてと、それじゃそろそろ私は帰るとしようかしら」

やることはやったのだからネネシヤも満足しただろう。インフェルはさっさと帰って明日に備えて寝ようと思ったのだが、彼女の手はしっかりとネネシヤに握られていた。

「……ネネシヤ、もうお祭りは終わってたでしょ？」

「まだよ。ほら、あそこにいる子達を見て」

言われた方向を見ると、そこには少女の集団がいた。見たところレーヴァテイルのようだが、どうも向けられる視線の中には少々情熱的なものも含まれているのが感じられる。

ものすごく嫌な予感がしたインフェルは反対側から降りようと背を向けるが、ネネシヤに手を握られている以上どうしようもない。

先ほどとは打って変わり、困った顔をするインフェルと楽しそうに笑みを浮かべるネネシヤ。

「……本気？」

インフェルの問いに対し、ネネシヤは当然と頷いてみせる。

「あの子達は明日お手伝いをしてくれる I. P. D. 達なんだけれど、前に会った時に言われたの。メタファリカを謳う前に一度で良いからインフェル様に会いたいな、って」

人気者ね、とまるで自分のことのように喜んでるネネシヤとは反対に、インフェルの方は面倒くさそうな雰囲気だ。

やはり意味がないと思ってるのだろう、その気持ちはネネシヤにはわからないかもしれないが、インフェルにとってはここで騒いでいるよりも一秒でも早くベッドに入って体を休めるのが先決だと思っていた。

これは隙を見て逃げ出した方が良くもれない。ネネシヤの手が離れた時がチャンスだ。「だからね、今日は絶対にインフェルを連れてくるってみんなと約束してたの。だからインフェルに断られちゃったらどうしようって不安だったから、ほっとしたわ」

逃げ出せなくなっちゃった。今ここで逃げ出したらネネシヤはみんなからウソツキ呼ばわりされてしまうかもしれない。それも、自分が逃げ出したせいで。

ため息をつく気にもなれなかったが、ならばさっさと終わらせて帰ろうと、インフェルは握られたままのネネシヤの手を軽く引く張った。

「なら急ぎましょ。明日だって早いんだから、あまりここで遊んでもいられないし」

「楽しむ時は楽しんで方がいいと思うわ」

「賑やかな時点で私は楽しめないの。ほら、早くすませましょ」

槽を降りた二人は、I. P. D. の集団の方へと向かった。

黄色い声を出して喜んでる彼女達に手を振りながら愛想良く近づくとネネシヤとは違い、インフェルの方は相変わらずだ。

「ネネシヤ様、こんばんは！」

「ごきげんよう、ネネシヤ様！」

ネネシヤに対してわっと集まる I. P. D. 達に、ネネシヤは笑顔で順番に挨拶を返している。インフェルとは違い積極的の外に出る社交的な彼女だからこそ人気だろう。

「ほら、インフェル。あなたも……」

「え？」

言われ、ようやく思い出した。ここにいる I. P. D. 達はインフェルに会いたくてネネシヤをお願いをしたということ。

とはいえあまり社交的でないインフェルは相変わらず愛想のない表情で、

「こんばんは、明日はよろしくね」

と、一言だけしか言わないインフェルに、周囲の I. P. D. 達が静まり返ってしまう。

……まずかったかしら？

空気が読めないわけではないのでそれについてはわかるが、だからといって何をすれば良いのかはわからない。

表情には出さないが若干の焦りを感じ始めた頃、I. P. D. の一人が、

「……想像通りだったね」

ネネシヤと違つて無愛想な御子だと思われているのだろうか？ まあそう思われたとしても特に問題もなければ興味もなかった。

「私たち、インフェル様の大ファンですよ」

「そう……」

つまらなそうに返事をするが、

「……は？」

予想外の言葉を言われたことに気づき、思わずマヌケな声を出してしまふ。

「インフェル様、握手してください！」

「ズルイ、私も私も！」

「明日頑張りますから、私にもお願いします！」

「え、ちよっ！ な、何よこれ、どうなつてるの？」

状況を理解できぬまま彼女達に強制的に握手だの抱擁だのをされ、ネネシヤに助けを求める。しかしネネシヤはそんなインフェルの姿を楽しそうに見ているだけだった。

「ちよ、あんたら一体なんなの？ 私のファンってなに？」

「だってインフェル様、いつも公務の際には表に出てきてくれないんだもの」

「そうですよ。みんなインフェル様に会いたいと思つたのに」

「ようやくお話しする機会に恵まれたんですもの。これくらい良いじゃないですか」  
と、腕にしがみ付かれた。

「ちよつと、インフェル様を独り占めするなんてズルイ！」

再びもみくちゃにされるインフェル。

理解できない。好意を向けられているのはわかるが、明らかに度を超えていた。

「……どうして？ 普段大鐘堂から出ない私なんかのファンになるなんて、おかしいわ」

「インフェル様はメタファリカの研究に着手していたのでしょ？ ネネシヤ様からいつもご様子をお聞きされていたからわかります」

「御子様であると同時に研究者。それでもつてほとんど表に出てこないから人柄も知られていないミステリアスな人なので、いつもネネシヤ様のお話を聞いてみんなでどんな人なのか想像してたんです」

「……ネネシヤ、初耳よ？」

「あら、そうだったかしら？」

と、とぼけたフリをするネネシヤを見て、やられた、と今更ながら思った。

ネネシヤはこうなることがわかっていて、インフェルを連れてきたのだ。  
 「ふふ、ごめんね、インフェル。でもあなたがいけないのよ。今までどれだけ頼んでも公務を私に押し付けて研究の方ばかり優先するんだもの」  
 「うっ……」

世界のためとはいえ研究はインフェルの趣味でもある。世界に貢献してはいるもののインフェルにとっては朝起きてから眠るまでの時間、ずっと楽しい思いをして過ごしているのだ。  
 一応御子でもある以上、もう少しそちらの方にも気を向けてもらいたいとネネシヤも思っているのだろうか？

「……ごめんなさい、今まで御子の仕事押し付けちゃって」

素直に謝るインフェルではあるが、ネネシヤは首を左右に振る。

「そういう意味で言ったわけじゃないの。あなたに会いたがっている人がこんなにもいるのだから、少しは表に出てほしいって意味よ」

「……そこまで言われるほど表に出てなかったかしら？」

「じゃあ聞くけど、最後に大鐘堂の外に出たのはいつ？」

言われて思い出してみると、ここしばらくは大鐘堂から出ない生活をしていたことによく気がついた。

軽く気分転換をするにしても、大鐘堂の中は広いから中を歩いたり、テラスに出て外の風に

当たる程度しかしていない。

「……まるでひきこもりだわ、私」

「今頃気づいたのね。けど、自分のことはいい加減なところってインフェルらしいわよね」

微妙に酷いことを言われているような気もしたが、間違っていないので何も言い返せなかった。

「へ……意外な部分が見られて感動しました、インフェル様」

二人の様子を見ていた I. P. D. 達が騒ぎ出す。

「しっかり者が優しく可愛くて、凄く頭の良い女の子ってネネシヤ様からは聞かされてたけど、うっかりさんってのも付け足さない」と

「ネネシヤ、後でちよつと話があるわ」

「インフェル、怖いわ。痛いことはしないでね」

「あなたにそんなことするわけないでしょ、まったく……」

微妙に怒ってはいるものの、どんな理由があればネネシヤに対して酷いことはできないようだ。ネネシヤの言う優しいという部分は当たっていると、I. P. D. 達は思った。

「面白い人なんですわね、インフェル様って……明日が楽しみです」

「メタファリカのことね？ 大丈夫よ、実験は成功したから確率的には……」

「そうじゃなくて、インフェル様の心の中を見させていただけるのが楽しみです」

「……え？」  
 インフェルの表情が強張った。しかしI. P. D. 達は明日のことを思うと楽しみで仕方がないのか、そんなインフェルの変化に気づいていない。

「……どういうこと、それ？」  
 「メタファリカを謳う時には、漆の御子であるインフェル様の中を見ることができのでしょうか？」

「インフェル様って謎の多いお方だから、どんな人なのかを知れるチャンスだもの。だからその話を聞いた時は本当に嬉しかったんです！」

自分の心の中を覗くことを楽しみにしている者達が大勢いるなんて、考えたこともなかった。人前に出ているネネシヤならばともかく、ずっと表にも出ない自分のことなど気にかける人間は絶対にいないはずだ。そう信じていた。だからこそ、インフェルは心の中を見られてしまうとわかっていながらも普通に過ごしてきた。

だがその自分の考えが大間違いだったことに気づいてしまった。

……見られる。私の心の中を、見られてしまう。私の何もかもがみんなに。

胸を締め付けられるような恐怖と同時に、目の前で明日のことを楽しそうに話している彼女達の笑いが、下卑たものに見える。

こいつらは自分の心の中を蹂躪するつもりだ。プライベートも何もない。全てを見尽くす

つもりだ。

「それじゃあインフェル様、ネネシヤ様。私たちはこれで」

「ええ、明日頑張ってください」

「はい……あの、インフェル様」

ビクッと体を震わせ、インフェルは自分呼んだ少女の方を見る。

「……な、なにかしら？」

「明日は一緒に頑張りますよね」

そう言っ、I. P. D. の集団は二人から離れていった。

残されたインフェルは呆然とした表情で去っていく彼女達の背中を見つめている。

「……インフェル、どうしたの？ 大丈夫？」

心配そうに声をかけるネネシヤだったが、インフェルには届いていなかった。

彼女の頭の中は明日を迎えることへの恐怖で埋め尽くされていた。

自分の心の中を見られても、彼女達は自分へ協力してくれるだろうか？ ネネシヤと違い表に出る仕事をほとんどしなかったのには、興味がまったくもないからというのもある。理想郷を作るのだから人々の平和のためと言ってはいるが、インフェルにとっては自分の研究物でもあったし、何よりもネネシヤの最も希望するものだからだ。

ネネシヤならばきつと、人々が平和に暮らせる世界を造るため、と民衆第一の考えを持って

いるだろうがインフェルはそうではない。そんな自分の心を、彼女達は受け入れてくれるのだろうか？

「……………」

「インフェル？　ねえ、インフェルってば」

足が震え始めているのがわかった。上手く力が入らなくて今にも倒れてしまいそうだ。

もしもここで倒れたら、すぐに大鐘堂に連れ戻されて明日のメタファリカまでは監禁状態で介護される。そうなたらもう、心の中を見られることを避けられない。

「……イヤ」

ボソッと呟くインフェルの声を、ネネシヤは聞き逃さなかった。

「……インフェル」

ネネシヤの呼びかけにハツとしたインフェルは、今にも泣きそうな顔でネネシヤを見た後、駆け出した。

「待って！　インフェル、待って！」

走り去るインフェルの背中にかけてネネシヤの声に、インフェルは振り向かなかった。

パスタリアの中心街から離れると、人気が感じぬ広場のような場所に出た。パスタリア中の人間が中心街に集まって祭りに参加している証拠だ。

その静まり返った広場の隅にインフェルはいた。

そこは明かりもなく完全な暗闇だというのに、そんな中で体を小さくして座っているために完全に周囲の闇と同化している。普通に前を通行する人間にはそこにインフェルが座ってることなど気づかずに通り過ぎるだろう。

インフェルは頭を抱え、必死に戦っていた。

今まで感じたことのない不安が彼女の脳内でグルグル回るが、それに潰されるわけにはいかない。そしてこの不安の原因は人に知られるわけにいかないため、相談することもできない。

翌日までに一人で解決しなくては、明日が来ててもきつと謳えないだろう。

「……見つけた」

すぐに見つかると思っていたので、その声にインフェルは驚かなかった。それどころか、ネネシヤの声を聞いただけで少しだけ落ち着いた気もする。

「お隣いい？」

返事をしない。彼女もそれがわかっているのか、黙ってインフェルの隣に腰を下ろした。

「……大丈夫、インフェル？」

「……ええ」

明らかに大丈夫ではないのは誰が見ても明白だが、御子である以上弱い部分を見せるわけにはいかない。そう強く自分に言い聞かせ搾り出したのがその一言だった。インフェル自身も下

手なウソをついてしまったと反省した。

「……心の中見られちゃうのは、怖いよね？」

返事もせず、ネネシヤの言葉を聞いた。

「でも私、少し安心したわ。インフェルは研究者でもあるから、そのためなら心の中を見られても何も感じないのかなって思ったこともあったから。私がインフェルと同じ立場になったら絶対に怖がる。ううん、それどころか逃げ出しちゃうかもしれない」

「……そんなことないわ。だって、ネネシヤは私よりもしつかりしてるもの。同じ立場だったとしても、絶対にあなたは逃げないし、弱音もはかないで謳うわ」

「無理よ、そんなの」

そういうとネネシヤは、インフェルの耳元に顔を近づけてそっと呟いた。

「私もね、見られたら人に嫌われること間違いないところ、あるよ」

「冗談はやめてよ。ネネシヤにそんなのあるわけ……」

言いかけて、インフェルは思い出した。

メタファリカを謳うのにはまず御子である自分達がお互いのことを認め合う必要がある、更に御子である適正を見極めるためインフェルスフィアという世界へ行く。コスモスフィアとは違いダイブマシンを使って行なうようなものではなく、団子に羽根が生えたようなスूपという生物を枕にして眠ることでいける世界だ。

そこでお互いの境遇や価値観を見せられ、時にはケンカしたりしながらも、お互いの深い部分まで認め合うことができて初めてメタファリカを謳える状態になるのだ。

そこでインフェルは、現実のネネシヤからは想像すらできない悪意に満ちた姿を見たことがあるのを思い出した。

「……………」

「……ね？ 私にもそういう部分はちゃんとあるの」

そう言いながらも、インフェル同様にネネシヤもインフェルスフィアで経験したことを思い出す。

「誰にだってそういう部分はあるんだから、あまり私を良い子だと思わないで。困っちゃうわ」  
「でも……ネネシヤがそれなら私はどうなっちゃうの？ ネネシヤだったらみんなから慕われるから、どんなことを考えていてもきつと受け入れてもらえる。けど私は違うの」

先ほどの I. P. D. の娘達のことを思い出す。

「私は、興味本位で見られるのよ？ 普段表に出てこないからどんな人か知りたい。それで隅から隅まで見られたりしたらきつと……」

メタファリカは失敗する。

「怖い……私、凄く怖い……」

ネネシヤと共に描いた理想郷メタファリカ。それが自分のせいで失敗したら一体どんなこと

になるだろうか？

メタ・ファルスの人間全てに見限られるかもしれない。だがそれより、その失敗でネネシヤまで失うことになったらと思うと、インフェルは怖くてたまらなかった。

成功の鍵はインフェルにかかっている。失敗すれば全てはインフェルの心のせいだ。御子であり研究者ではあるが、インフェルとてまだ若い。そんな彼女に世界中の期待がかかっているとすればそのプレッシャーに押しつぶされたとしてもおかしい話ではない。

「……ねえ、インフェル。メタファリカ諷いたくない？」

諷わなければ少なくとも世界はどうこうならない。どれくらい持つかはわからないが数百年はこのままの状態で存在していられるだろう。

諷いたくないに決まっている。いや、心を見られたくないから諷いたくない。

そう言いたかったが、ネネシヤの手前それだけは言えなかった。

ネネシヤも同様に、一緒に逃げてしまおうと言っただけは言えなかった。

だが二人とも御子という立場にあり、お互いの夢がメタファリカの完成であることを知っている。だからそれだけは絶対に言えなかった。

無言の時間が続く。お互いに何と言葉をかけてやれば良いのかわからない。

「それじゃ、逃げちゃいませんか？」

え、と驚いてインフェルはネネシヤを見た。だがその声はネネシヤのものではない。

ネネシヤのしている視線の先に、その声の主は立っていた。

「……アナ？」

「探しましたよ、インフェル様、ネネシヤ様……あれほど勝手に出歩かないでと言ったのに」

そう言う彼女の手には、大きなバッグが二つ握られている。その一つからは見覚えのある大きな耳がのびていた。

「ミニミニ！」

「はい、持ってきちゃいました」

バッグの中からウサギのぬいぐるみを出すと、それをインフェルに渡す。

「他にも日用品だけは持ち出してきたから、普通に暮らすには困らないはずですよ」

「……どうということなの、これ？」

「私はお二人の騎士ですよ？ 主人であるお二人が何を考えなのかくらい、わかっちゃってます」

ふふん、と得意げな顔をするアナ。

「多分今夜逃げたとなると大騒ぎになるのは避けられないと思うんです。だから、とりあえずリムカスラムの方に逃げようかと考えてます」

「待ちなさい！ アナ、あなた自分が何を言っているのかわかっているの？ そんなこと御子に對して言うなんて無礼にも程があるわ！」

「では、どうしてこのようなところにいるのですか？」

「そ、それは……」  
心の中を見られるのに怖くなって逃げたのだが、どこにも行く場所がないことに気づいてこの場にうずくまっていた。

「それに、心の中見られるのが怖いって言ってるの、聞いちゃいましたからね。それってメタファリカ謳うの怖がつてる証拠じゃないですか」

「……いつから聞いてたの？」

「もちろん最初からです。外にいる以上離れるわけにはいかないので、ずっと陰ながら見張っていました」

これを持ってね、と二つのバッグをパンパン叩いてみせる。

「……ご迷惑でしたか？」

「……………」

答える代わりに、インフェルはアナの手からミミミの入れられていた方のバッグを受け取った。

バッグの中には本当に最低限の日用品の類が詰め込まれていて、売れば金にもなりそうな貴金属もいくつが入っている。自分の生活資金に使うために大鐘堂に保管されていたものを勝手に持ち出してきたのだろう。

「騎士がこんなことするなんて……」

「御子様のためだから問題はありません」

「でも、私……」

自分達は大鐘堂から逃げようとしている。そうならばもう御子でもなんでもなくなっても構わない。

「そ、それに、こんなことしていいと思ってるの？ 私達が帰らなかつたらメタファリカは謳わないのよ？ 理想郷が欲しくないの？」

「……インフェル様はどうしたいのですか？」

「わ、私はどうでも良いんだってば！ 今はあなたに聞いていいのよ、アナ！」

「それこそわかりきってるじゃないですか。私はお二人に従う身ですから、お二人についていきます」

けれど、と続き、

「何をするにしてもそれが嫌々だと思つたら、私は全力で止めます。それも私のお仕事ですからね」

どんな選択をしようとも、アナはインフェル達に従うつもりだった。そしてたとえ選んだとしても、インフェル達が仕方なく嫌々選んだものであるのであれば、強制的に反対の選択肢を選ばせるといふ。

「お選びください、インフェル様、ネネシヤ様」

「選べと言われても……」

逃がたい。だがそんなことを言えばネネシヤは何と言うだろう？

インフェルにとつて数少ない理解者、その中でも一番自分のことをわかってくれているであろうネネシヤを失うようなことにはなつてもらいたくない。となれば、答えは一つしかなかった。

「……ねえ、インフェル」

と、ネネシヤはアナからもう一つのバッグを受け取り、中身を出した。出てきたのは安っぽい女物の服と、変装用のウィッグが二人分。

そのうちの一つをインフェルの方に差し出した。

「私は、インフェルが一番幸せな道が良いわ。だってメタファリカを謳って一番辛い思いをするのはインフェルだもの。あなたが選ぶのは当然のことよ」

ネネシヤから渡された変装用の服とウィッグを手に、インフェルはネネシヤを見つめていた。「でも、これじゃあネネシヤの夢が……」

「……あの、一つ聞いて良いですか？」

難しい表情を浮かべたアナがインフェルに問う。

「あくまでも私個人の意見ですけど、謳い手であり創り手でもある方が犠牲になつてまで手に

入れたもの、それって理想郷なんですか？」

「私が黙つてればわからないわ！」

「明日全部見られた時にバレちゃいます。それに、今聞いてしまったネネシヤ様と私にとつては、もう理想郷じゃないです」

アナはわかつてた。インフェルが民衆のためではなく、インフェル自身の夢とネネシヤの夢を叶えるためにメタファリカを紡ぎだそうとしているのを。そしてネネシヤの夢は理想郷メタファリカを作つてみんなが幸せに暮らす世界を造ることを。

今のままでは、結果がどうなろうとネネシヤの夢を壊してしまうことになる。それに気づいたインフェルは頭を抱えてしまう。

「わからない……じゃあ、一体どうしろっていうのよ！」

「インフェル様は何をしたのですか？ どうして、それをしたのですか？」

逃げたかった。自分の心の中を隅から隅まで見られたらメタファリカは絶対に失敗してしまふ。

けれど、それは逃げたいから逃げるといふわけではない。謳って成功させたいと願っている。だがそれには心の中を見せられる状態にしなければならない。I. P. D. の少女達はインフェルの心を見られることをすごく楽しみにしている。その状態になった時に隅々まで見られたら自分の黒い部分が丸見えの状態になつてしまい、みんなは自分に対し反感を抱くだろう。

そうならば失敗し、誰からも蔑さげすまれる結果に終わる。だから逃げ出したいと思った。  
 「……成功なんかするわけない。私の心の中を見たら、みんな絶対に嫌がるもの」  
 今でこそファンだのなんだ言ってる人が、自分の心を見た瞬間に突然コロッと心を入れ替えたりされたとしたら、それはインフェル自身の人間を否定されるにも等しいことだ。

「私は民衆第一の考えを持っていない。研究に没頭していた理由の中には、彼らの相手をするのが面倒だからというのもあった。そんな御子を、あなたは今と同じで守ろうって気になれるの？」

「そのどこがいけないんですか？ 御子様だって人間です。そういう部分が一つもないなんて、そんなの逆に信用できません！」

強く言うアナに、インフェルはたじろいだ。

「私はインフェル様とネネシヤ様の傍そばにいて、ずっとお二人を見てきました。それまでは御子様がどんな方なのかもわからなくて、本当に清廉潔白せいれんけつぱくで民衆のためだけに生きている人なんだと思ってたんです」

「そうよ、みんなそんなの想像してるのよ。だから私の心なんか見たら……」

「だから私は安心したんです！ インフェル様に声をかけてもらって、お二人の傍でずっと見てたから……二人とも、メタファリカ以外にも大切なものを持つて普通の人だっというのがわかったから……メタファリカが成功した後の夢を持つているのを知って、私は嬉しかったん

です」

「そのどこが安心して嬉しく思えるの？」

「メタファリカの後のことを話し合えるのは、成功させる自信があるからでしょ？ そのために一生懸命になっている。みんなも御子様と同じなんです。メタファリカの後にやりたいことが沢山あるから、だから御子様達を慕したっているんです」

アナが何を言いたいのか、ネネシヤは気づいた。

「……私達は、この世界のみんなと同じ願いを持つていて、ってこと？」

ネネシヤの言葉にアナは大きく頷く。

「何言ってるの？ そりゃみんなメタファリカを成功させたいと思ってるのは当然じゃない」「違うわ、インフェル。アナが言いたいのは、メタファリカを成功させた後の話のことを言っているの……私達がメタファリカを謳うのは大陸を紡ぐこと、理想郷を造ること。そして、私達の夢を叶えること。そうでしょう？」

ネネシヤの言うとおりだ。メタファリカは自分達の夢を叶えるために必要な手段でしかない。夢を叶えるためにも、それが可能になる環境を作らねばならない。だからメタファリカを謳うのだ。

「そう思っているのはみんなも一緒なんです。けど、御子様はメタファリカを謳うのが夢だと書いている人が沢山います。私もその一人でしたし……けど、インフェル様の心の中を見るこ

とでそれがわかつてもらえるはずです。御子様も自分達と同じ夢を持った普通の人なんだな、つて。そうすれば……」

アナは少し言葉を考えてから、

「本当のインフェル様だって、きつと受け入れてくれるはずですよ」

本当の自分を受け入れてくれる人。果たしてそれが本当にいるのだろうか？

インフェルスフィアを経験したことがあるインフェルは、自分の認めたどんなに心優しい人間であっても簡単に受け入れることのない欠点があるのを知っている。それを接点がほとんどない人達に見られたとしても、本当に受け入れてもらえるのだろうか？

だが、そこまで深い部分にあるものを見たとすれば、自分もみんなと同じ夢があり、それを叶えるためにもメタファリカを謳おうとしているというのも見てもいいはずだ。それならば、気に入らないところがあったとしても受け入れてもらえるかもしれない。

「インフェル……不安はあると思うけど、きつと受け入れてくれるわ。だから、まずはあなたがみんなを信じてあげて」

「……私か？」

「ええ、そうよ。だってあなたがみんなのことを信じてあげられないのなら、もし謳ったとしてもみんな離れていっちゃうわ。自分達を信じてくれない御子様にはついていけない、ってね」

「……………」

「けど、もしも逃げてしまいたいというなら、それも一つの答えよ。それを選んだとしても、私はあなたを軽蔑けいべつしたり、一人にしたりはしないわ」

と、インフェルの手を握る。

「私もですよ。ちよつと生活が厳しくなるかもしれないけど、御子様を守るのが私の役目ですから。逃げる時はもちろん、逃げた先でもずつとお二人をお守りいたします」

アナはもう片方のインフェルの手を握った。

「だから何も心配することはないわ……さ、誰かが来る前に早く決めちゃいませよ」  
「……………」

本当に自分はメタファリカを成功させることができるのだろうか？

失敗する確率が高いのならばやらないのが一番だと、インフェルは思っている。下手をすればリムが落ちるかもしれないのだから、絶対に大丈夫だと、絶対に成功するという保証がないのならば謳わない方がいい。

しかしメタファリカに必要なものは全て揃っている。

あとは謳った時に、インフェルの想いがみんなにどう思われるかで決まる。

一体、自分の心はどう思われるのだろうか。それを考えると怖くてたまらない。

けれど今インフェルの手を握っている二人は、そんな恐怖から逃げようとしているインフェ

ルの味方になってくれるという。逃げたとしても、謳ったとしても、その結果がどんな形になろうとも隣にいてくれる。

恐怖は感じている。しかし体の震えは治まっていた。

「……本当に？」

ぼつりと言ったインフェルの言葉に二人が耳を澄ませる。

「本当に、逃げてもいいのね？」

その言葉に二人が笑顔で頷くのを見て、インフェルは決めた。

「……なら、謳ってみるわ」

「……謳うの？」

「無理してまで謳う必要はありませんよ、インフェル様」

インフェルは左右に首を振る。

「大丈夫……ちょっと怖いけど、でも、謳いたい」

メタファリカを謳わなくていいと笑顔で言ってくれた二人のためにも。

「理想郷を造って、夢を叶えたいの」

メタファリカを造りたい。そして、ネネシヤの夢も叶えたかった。

「だから……みんなを信じてみようと思う」

民衆も自分と同じでメタファリカを望んでいるのならば、力を貸すはずだ。例えそれがイン

フェルの心の中でどんなものを見ようとも。

「もう平気……みつともないところ見せて悪かったわ、二人とも」

返事の代わりに、両手を少し強く握られた。

## メタファリカ前夜 2

昔のことを思い出したインフェルは、今のクローシエ達の姿と見比べた。

今のクローシエほど取り乱してはいなかったが、彼女も同じような不安と恐怖に潰れてしまいかけた。だがそんな彼女を励まし、護ってくれる存在がいた。そうでなければきっとインフェルは逃げ出していただろう。

クローシエもインフェルと同じで、傍で支えてくれる人がいる。

ルカは今、過去のネネシヤ達がインフェルにしてあげたのと同じく逃げるという選択をクローシエに話していた。

抱きしめられたままのクローシエは、首を振って否定する。

当然の答えだろう。例えばどれだけ不安で怖くても、クローシエの夢はメタファリカを成功させて誰もが幸せに暮らすことのできる理想郷を造ることだ。それだけのために生きてきたのだから、嫌でも何でも逃げ出すとはウソでも言えなかった。

ルカは体を震わせ泣きじゃくりながらも、メタファリカを謳うと言っているクローシエの頭

を優しく撫でた。

まるで自分よりも年上のようなオーラを持つ妹。人生のほとんどを人から頼られ、崇拜される存在であり続けながら、平和のために必死に生きてきた。世界のため、そして自分のため。

姉であるルカはそんな妹を探しだし、また家族みんなで生活をしたという願いを胸に今までの人生を生きてきた。自分のために。

自分にとって大切なものを手に入れるために生きてきたことに変わりはないが、大きさがあまりにも違い過ぎている。自分の幸せを手に入れることを考えるだけで精一杯だったルカに対し、クローシエはメタ・ファルスに住む全ての人のことを考えて生きてきた。

ルカもその姿を近くで見えてきた。インフェルスフィアでも見てきた。だからクローシエがここまで怖がるのもわかっていた。

……心の中を見られることではなくて、心の中を見られたことが原因で失敗することが怖いんだ。

しかし逃げ出せば自分の今までの人生を捨てるようなもの。どちらを選ぼうが逃げられない。

「……メタファリカ、謳える？」

ルカの問いに、クローシエは頷いた。

「……謳いきってみせる……怖くて不安でも、逃げられないもの……」

「……………」

ルカは悩んでいた。言うべきか言わぬべきかを。

「……謳うしかないもの。私は、メタファリカを謳うために生きてきたのだから」

「……嫌だな、そういうの」

ルカの言葉に驚き、クローシエは顔を上げた。

「私、ちょっと嫌かも……不安を抱えたままで謳うなんてできない」

「……何よそれ？ ふざけないで！」

クローシエは怒りに任せルカを突き飛ばした。

「あなたは心の中を見られたりしないのだから、そんな関係ないじゃない！」

「うん、私の心は見られないよ」

「それなら……」

「でも、失敗したら私、死んじゃうから……」

まだ死にたくないかな、と困ったように笑ったのを見て、クローシエはルカの抱えているリスクを思い出した。

メタファリカを謳う二人ではあるが、二人とも別々のメタファリカを謳う。

ルカが謳うのをエクゼク・メタファリカといい、この世界の神であるフレリアと繋がって大陸を紡ぎだすための詩だ。しかし大陸を紡ぎだすために必要な力は膨大でルカとフレリアだけの力では足りない。普通に謳えば一分もしないうちに生命力を持っていかれて死亡してしまう

だろう。

そこでクローシエの謳う、メソッド・メタファリカの力が必要になる。これを謳うことで大勢の I・P・D・達と心を繋いで擬似的に一人の人間を作り上げて想いを集め、大陸を紡ぎ出す為に必要なエネルギーをルカに流し続けるという役目を持つ。

それが出来なければ、ルカは死んでしまう。

しかしクローシエには理解できないことがあった。

自分の命を預けているクローシエがこんなに取り乱しているというのに、ルカは普段と変わった様子がない。

「……どうして笑っていられるの？」

本当ならクローシエを慰める余裕などあるはずがない。心を見られるという不安を盾に自分勝手なことをしてしまった自分に対し、罵声の一つは浴びせてもおかしくはなかった。

けれどルカはクローシエの言葉に首をかしげる。まるで意味がわからないといった感じで。「命がかかっているのよ？ どうしてそんな笑っていられるの！ もっと怖がっていいはずよ、死んでしまうかもしれないのに」

「……私は、心の中を見られないからかな？」

心の中を見られるのに比べたら、死ぬことなんてなんでもないと考えているのだろうか。

「クローシエ様が強がっているのは、ずっと見ててわかったよ。けどどれだけ強がっていても、

心の中を見られた時には全部バレちゃうよね？」

表に出していなかったとしても、ずっと不安に思っていたのは事実だ。

「けど、私は心の中を見られない……だから、最後まで強がっていたら誰にもバレないもの」  
「それはそうだけど、でも……」

「それに、クローシエ様がこうなるんじゃないかなってなんとなくわかってたから……強がってれば、その時には私が元気づけてあげることができるんじゃないかな、って思ってたんだけど……」

無理だった。今のクローシエは謳うと言ってはいるが、不安を抱えたままだ。

「メタファリカを謳えばきつと成功する。そうすればクローシエ様……レイカちゃんと一緒に、幸せな生活を送れると思って、謳うのが楽しみでしかたなかったんだけど……なんだか、今のままだと失敗しちゃう気がして……」

ようやく再会できた妹とまた一緒に生活する日々を送ることができなくなるかもしれない。その不安からルカは強がることができず、ずっと隠していたそれを言ってしまった。

「言わないでいたかったんだけどなあ……」

誰も気づかなかっただろうが、ルカはずっと不安に耐えることでクローシエのことを見守ってきた。そして今も、必死にそれを隠してクローシエを励まそうとしていた。

そんなルカに対して、自分はなんてことをしてしまったのだろうか。

「ルカ、私……」

謝らなければいけない。許されることではないが、それ以外にクローシエにできることはない。

「ごめんね」

それを言ったのは、ルカの方だった。

どうしてルカが謝るのが理解できないでいるクローシエを、再び抱きしめる。

「小さい頃、レイカちゃんを護れなくて……今度こそ最後までレイカちゃんを支えていようと決めたのに、それもできなくて……弱いお姉ちゃんで、本当にごめんね」

背中に回されたルカの手は、若干きつく感じられる力が込められていた。

二度も妹を護れなかった。力も心も弱い自分が悔しくて堪らない。今すぐにでも声を上げて泣きたいくらいに自分を情けなく感じていた。

けれど今はできない。不安を抱えて苦しんでいる妹の前で泣いてたまるものかと、必死に涙を堪えていた。

「ウソよ……そんなの、ありえない……」

自分のことを第一に考えてくれているルカの気持ちを楽しんでも、理解できなかった。

「失敗したら、死んでしまうのよ？ 不安のまま謳わないでって、そうじゃないでしょ？ 絶対に失敗するから謳うんじゃないって、そう言うのが正しいはずだわ」

絶

抱きしめられているために見えなかったが、ルカが首を左右に振ったのを感じた。

「……そんなこと、私には言えないよ。だって私は、何があるかと謳うつもりだもの」「どうして!」

「メタファリカは、私の大切な妹の夢だから……そのためならどんな協力も惜しまない」「けど私のせいで失敗するかもしれないのに」

「私は信じてるよ。レイカちゃんの想いが世界中の人に受け入れてもらえるって……だって、私はレイカちゃんのお姉ちゃんだもの」

例えメタファリカが失敗し、それにより死んでしまう事態になったとしてもルカに悔いはなかった。最後まで妹を信じて、最後まで謳いきることができれば、それだけでもルカは満足だと思っていたから。

クローシエがルカの背に手を回した。

「……信じてくれるの? 私が、メタファリカを成功させるって」

「その証拠に、明日は思いっきり謳ってみせるよ」

「……本当に良いの? 死んじゃうかもしれないのに」

「そんなことにはならないって、信じてるから」

怖くないわけがない、強がりだ。それに気づかないクローシエではなかったが、今はそれがありがたかった。

最後まで強がって、一度は不安を漏らしたが、それでも自分のために強がってくれる姉の存在が。

「……死なせないわ」

もう、クローシエに不安はなかった。

「お姉ちゃんを、絶対に死なせはしないから……」

不安を感じている余裕などない。そんなもののために、大切な家族を奪われてたまるものか。「絶対に成功させるから、私に協力してくれる?」

「……うん。それでこそレイカちゃんだね」

強く抱きついてくるクローシエの頭を、ルカは優しく撫でた。

「……………」

ソル・マルタのインフェルは二人の様子を見てショックを受けていた。

彼女もクローシエ同様に不安に潰されそうになり、励ましてもらうことで立ち直れた。

けれどその時、失敗したらネネシヤが死んでしまうことになるかもしれないなんて、思っただろうか?

自分の心の中を見られることで失敗してしまうかもしれない。それだけを考えるのに必死で、ネネシヤのことを考えてあげられていなかった。

メタファリカを謳うのは自分のためでありネネシヤのためでもあると言っておきながら、肝心なところでネネシヤの支えになれなかった。

……なんて、一言も聞いてあげられなかったんだらう。

ネネシヤはメタファリカを謳うのが怖くないの、と。どうしてその一言を聞いてあげられなかったのだらう？

四百年前にやり残したことに気づき、インフェルは一人後悔の念に苛まれた。

## とある騎士達のほやき 2

メタファリカ当日の朝のことだった。

だんじょうどう大鐘堂演説広場には既に多くのI. P. D. 達が集まっており、チェスターの指示通りに騎士達に誘導されて整列の準備をしていた。

「今日の夕方頃には、一体俺らどこにいるのかね？」

I. P. D. 達の誘導をしていた白い騎士が、隣の青い騎士に言う。

「やつはメタファリカ大陸の上かな？ でも、大陸できてもまだ何もいからなあ……しばらくは下から眺めてるだけか？」

「気の早いやつだ。もう成功したときのことを考えているのか？」

「当然だろが……って、そうだったな。おまえは成功しないと思ってたんだっけか」

「そんなことは言っていないだらう？ もしもの時のことを考えていただけだ」

「はあ……ネガティブな奴」

あれから少しは彼の考えも変わったのだろうかと期待していたが、まったく変わっていないようだった。

# アルトネリコ3 世界終焉の引鉄は少女の詩が弾く

## 完全新作アフターストーリー

2011年3月15日 上下巻 同時発売!!



下巻：384 ページ / 704 円 (税込)



上巻：336 ページ / 683 円 (税込)

作：富松元気    カバーイラスト・口絵：風良    挿絵：辻田裕子 (ガスト)

GA 文庫 (ソフトバンク クリエイトィブ株式会社)

(C)GUST CO.,LTD. (C)NBGI